

蓮  
如  
上  
人  
に  
学  
ぶ

池  
田  
勇  
諦



蓮如上人御影（東本願寺藏）

もくじ

一、どこで蓮如上人にかかわるか	1
二、私にとって真宗とは	11
三、伝統に参加する	25
四、時代の持つ課題	32

一 どこで蓮如上人にかかわるか

「蓮如上人れんじょうにんに学ぶ」ということで、申し述べたいと思います。こうしたテーマを提出したということにつきましては、実はこの夏、ご本山あんごの安居のご縁をいただきまして（昭和六十二年安居次講に『改悔文』—真宗教化学の課題」の講題で出講）、いささか蓮如上人のご教化きょうかについて学ばせていただくことがありまして、そうしたなかから改めて私自身のなかで、今日こんにち、蓮如上人に学ぶ意義というものはいったいどこにあるのか、そのことを自分なりに確認しなければならぬという課題意識にかられまして、私なりに考えさせられますこ

との一端を、お聞きただこうということです。

今日の時点で蓮如上人に学ぶ意義はどこにあるのかと、改めて問わなければならぬということには、それほど今日、蓮如上人について、等閑視とうかんししているということではありませんが、少なからず距離をもっているという現状があるからではないかと思えます。と、申しますのは、一九九八年に蓮如上人の五百回会えが到来します。私どもの教団では、ご存じのとおり宗祖の七百回会を機縁きえんとして同朋会運動どうほうかいというものが展開されてきておるわけですが、その運動もいつのまにか四半世紀、二十五年になろうとしており、その意味では確かに同朋会運動の一つの曲がり角にきていると言えるかと思えます。そういう私たちの教団の今日的な問題を考えたとき、そういう時点において蓮如上人に学ぶということ、さらには蓮如上人の五百回会をお迎えするとい

うことは、どういう意味をもつのか、これはぜひとも私ども一人ひとりが考えなければならぬ大事な事柄ことばでなからうかと思う次第しだいです。

私どもの教団は、端的たんできに申しまして、親鸞教団しんらんか蓮如教団かということがいろいろな問題を通して常に問われてきております。といたしますと、そこに一つ言えることは、そう言われるということ自体、それほどに蓮如上人の存在というものが私どもの教団にとっては実に大きいということでありましょう。

ところがその存在の大きな蓮如上人について、近年はあまり私どもが顧かえりみないと言いますか、注目しないという傾向があるわけです。それはいったいどうしたことであろうか、どうしたことによるのであろうかと考えますときに、特に今世紀に入りまして、きり詰めて言えば昭和に入ってからと言っ

の方がよいのかも知れませんが、歴史家あるいは思想家といわれる人々から、蓮如上人に対するたいへん敵しい評価が提起せられてきたということがあるからであります。それというのは、それまでの蓮如上人を通した親鸞聖人の教えの学び方、聞き方が、それらの人々によって直接親鸞聖人に迫る方法が構築されたことから、いきおい蓮如上人に対する評価が敵しいものになってきたからであります。

敵しい評価というその内容につきましては、いろいろ指摘されるわけですが、集約いたしますと次の二点になるうかと思われます。一つは、蓮如上人という人は未来主義者ではないか、親鸞聖人の「聞其名号信心欢喜」がそのまま「即得往生」というあの積極的な往生理解というものに対すると、もっぱら「後生の一大事」という形で来世の往生ということを主張しておら

れる、だから宗祖に比すると蓮如上人という人は未来主義者ではないかと、そういうことがまず第一に指摘されるわけです。それから今一つは、蓮如上人という人は体制追随の人でなかったのか、宗祖の場合の、あの苛酷なまでの法難の状況下にあっても、決して不透明化することのなかった生き生きとした批判精神に対すれば、蓮如上人はいわゆる王法為本ということとで、「まづ王法をもつて本とし、仁義をさきとして、世間通途の義に順じて」日暮らしをせよと、そういう形でお示しになっていて、宗祖のごときはつらつとした批判精神というものはどうも感じられない。だからその意味においては蓮如上人という人は、宗祖に比すれば一歩も二歩も後退しておるのではないか、そういうご指摘です。

そのような二つの点に集約されようかと思いますが、そうした二つをもつ